
番外編：大樹が枯れたその後に……

甲崎 零火

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

番外編：大樹が枯れたその後に……

【Nコード】

N5655C

【作者名】

甲崎 零火

【あらすじ】

ここは、私が連載していました「大樹が枯れたその後に……」の番外編ページです。読んで下さった方の人数、リクエストに応じて投稿しておりますノお久しぶりです。番外編に「紅月の神」を掲載しました。本編の本当の意味での最終話です。この最後を私に作らせて下さったHALTAさんに感謝いたします。

琉禍（来場者人数100人記念）

俺は昔からヤナガキだった。

眉目秀麗。誰もが俺の事をそう評価し、甘やかされた。この年になるまで何にも苦労した事がない。

姉さんもそうだったが、あの人の場合はかなり天然に近かったから俺みたいにはならなかった。……もつとも、かなり歪んでいた事を、中三の時に思い知らされたが。

その頃は、姉のそんな裏面を知ってしまった事に罪悪感を感じていた。姉がその裏面を知ってほしかったのは俺じゃなくて、樹さんだったから。

家でも外でも傲慢に振舞っていたのに、あの頃の俺はそのせいで、不気味に静かになった。

親には迷惑をかけたと思う。長女があんな風な事になってしまった、さらには長男の様子まで急に変になってしまったのは、もう気が気じゃなかったろう。

心配する親に、俺は何も言わなかった。

元々、俺が言う事を聞くのは姉さんとその親友である、帳樹（やぶき）さんと夜霧大樹（よぎりたいてい）さんの三人だけだったから、親は諦めていたのかも知れない。

ただ、元気に、無事にいて欲しい、という感じだった。

それは九年経った今も変わらない。一人暮らしたが、結構頻繁に電話がかかってくる。

昔よりも、俺が話しやすくなったからかも知れない。

姉さんが死んでから、俺はあまり我儘を言わなくなった。

というより、言えなかった。

「琉禍」

声と同時に、下を向いていた視界に、見慣れた革靴が見えた。

そして俺の頭を、くしゃりと撫でる手。

ああ。この暖かい手。

「……樹さん」

顔を上げると、微苦笑を浮かべる樹さんの顔。

「何で待ち合わせしてるのに、お前は俺を探そうともしないですつと下向いてんの。探せ」

俺はそのまま抱きつきたい衝動に駆られたけど、自制した。

だって、この人はずっと前から別の人のものだ。

俺から触れていい人じゃない。

「……樹さん、に、俺を、見つけ、て欲しかったから」

俺は樹さんを見ていられなくなって、赤くなった顔を俯いて隠した。

彼のため息が、後頭部に当たった。

「あんまり可愛い事言わない。そんな事してるとゲイに襲われる」

……貴方だってゲイじゃないですか、大樹さんの事ずっと好きだったじゃないですか、とは言わない。言えない。

確かに俺は照れてもいますけど、貴方に襲われたくてこんな事してるんですよ、とは言わない。言えない。

俺たち姉弟は、貴方が思っているほど純心じゃないですよ。姉さんの事で、思い知ったんじゃないんですか、とは言わない。

言えない。

「じゃ、行こか」

樹さんにそう言われて、俺は顔を赤くしたまま、こくこくと頷いた。

樹さんが連れて行ってくれたのは、ほどよく暗くて、品のいい音楽を流した店だった。

何だか高そうだ、と思ったが、

「見た目高そうだけど、ここはそんなには高くない」

と樹さんは笑っていった。……顔に思っている事が出てたんだろ
うか。

「どうなの？社会人二年目は」

彼は酒に口をつけながらそう言った。……流し目、綺麗だ。

「ぼちぼちです。でも、みんな親切ですよ」

「そう？」

「ええ。あの部署は雰囲気いいですし、好きです」

「俺と同じ部署だったら、もっと可愛がってあげたのに」

「……それは、緊張して仕事にならない気がします」

樹さんは、ははって笑った。昔の樹さんはこんな風に笑う人じゃ
なかった。もつと、口元をほころばせるような、可愛い笑い方
をする人だった。けれど、いつの間にか、こうなっていた。

それは、ほんの少し無理をしているように見えて、俺は尚更そん
な樹さんに惹かれていった。

それで、俺は樹さんと同じ大学に行き、その大学を卒業してから
樹さんと同じ会社に入った。

我ながらストーカーっぽい。

でも、樹さんは笑って許してくれた。弟みたいなお前が懐いてく
れているのは嬉しい、と言ってくれた。

俺が告白した時も、気持ち悪がったりしなかった。

でも、返事は貰ってない。もうずっと前の事だから、若干諦めて
いる。

「樹さんは、どうですか？社会人三年目」

「俺は、ぐったり……仕事多すぎ」

がっくりと肩を落として言う彼に、俺は笑ってしまった。

「同僚もみんな出世！って感じで眼の色が違う。周りを敵だと思っ
てる。絶対」

何だか俺のいる部署と随分違う。同じ会社でもそんなに違うもの
なんだろうか。

「ああ、やっぱり琉禍は内の部署じゃなくて良かった。琉禍にこん

な思いさせたくない」

そう言って、またぐしゃぐしゃと俺の頭を撫でてくれた。

……。何故この人は無意識に俺を煽るんだろう。

これは言わなければならぬ。こんな風にされてたら、俺の身が持たない。

俺ばかりが、この人に揺さぶられている。この人は、見掛けを取り繕いはしていても、俺の言葉に、俺そのものに、感情を動かされることなどないというのに。

「……樹さん。あんまり僕を煽らないで下さいよ」

「煽ってない。可愛がつてる」

「……じゃあ、可愛がらないでくださいよ。じゃないと……」

樹さんは、にやにやと笑った。

「じゃないと、何？」

「じゃないと……襲いますよ？」

あはは！と樹さんは声をあげて笑った。……俺から見たら、不自然なほどの、笑顔。

「俺を襲うのか？可愛いな。いつでもいいよ、琉禍なら」

樹さんはそう言って、またも俺の頭を撫でた。

……樹さんが、俺をよく構ってくれる理由はよく分かっている。

俺と話す時はわりと笑っているけど、他の人と話している時、眼の底が笑ってない。

樹さんは、昔はこんな風に笑う人じゃなかったし、もっと物静かで何考えているか分からない人だったけれど。

でも、昔は眼がちゃんと笑っていた。

もっと、幸せそうだった。

樹さん。まだ駄目なんですね。

……樹さん。俺、知ってるんですよ。

俺、貴方がただの会社員じゃない事知ってますよ。

貴方が、俺にある程度優しく接した後に言うつもりの言葉を知ってますよ。

俺は、樹さんや大樹さんみたいに鈍感じゃないですから。

でもね、俺、それでもいいんですよ。貴方がそうしたいなら、俺は構わないんですよ。貴方が少しでも幸せになってくれたなら、俺はそれが一番なんですよ。

「ねえ、樹さん」

俺は胸にしびれるような想いを感じた。

「俺が死ぬ時は、樹さんが先に殺してくださいね？」

酔った勢いみたいに言っただけで、眼だけは感情と想いを込めた。彼は一瞬、惚けた様な顔をしたけれど、微笑を浮かべた。

「……琉禍、お前……」

「樹さん。俺、知ってるんですよ。ずっと、知ってたんですよ。でも、俺はそれでも貴方が好きなんですよ」

必死に言った。いつかに、樹さんが俺に言おうとしている事を、知っているんだと告げる。

樹さんは、苦しいみたいに胸を押さえて言った。……それはもう手に入らない何かへの諦念と執着の入り混じったものであり、俺の言葉に心を動かされている訳ではない。

貴方は俺の中に何を見ているのか。

知っている。そして、知らないふりを続けるのは疲れた。

「……俺がもし、琉禍を好きになっていたら、今頃どんな風になってたかな」

……そ、んな事、を。

「……そんな、ありえない事を」

「うん、分かってる。でも、そうだったなら、幸福になれたかな。俺は普通に会社員していたかな」

今からでも遅くないですよ、と言いたかった。言えなかった。

樹さんは今もずっと、大樹さんに、囚われたまま。

「……ごめんな。琉禍」

「……それは、貴方のしている事についてですか。それとも俺を好

きになつてはくれないという意味ですか」

それとも、俺を見てはいない事についてですか……？

樹さんは俺の肩をそつと抱き寄せた。

「……俺は自分のしている事を正当化するつもりはないけど、悪い事をしていとは思ってない。俺が謝つたのは、俺は未だに大樹を忘れていないのに、それでも琉禍に想われていたくて、ふつてあげられない事」

……なんて。

大樹さんに似た俺に想われていたい、だなんて。

俺は喉から絞り出すように声を出した。

「……貴方、勝手ですね」

「……すまん」

……樹さん。貴方が捨てられた犬のように見えますよ。

馬鹿な人。それでも俺にとっては貴方が唯一だ。犯罪者でも、何でも。

たとえ貴方が、姉さんの……

「……樹さん。貴方が死になくなったら、俺が殺してあげますよ」

樹さんは、駄々をこねる子供を見る様な表情で、俺の顔を見た。

「だから、貴方が死ぬまで、俺が死ぬまでそばにいさせて下さい。

何でもします」

涙が出た。自分のやっている事は、本当に正しいのだろうか。

分かっている。正しくなどない。

本当に貴方を想うなら、警察に通報すべきだろう。

でも、そんな物事の正否だけで行動する事は俺には出来ない。

……俺はただ、少しでも長く貴方のそばにいたい。だから。

その時は、一緒に死にましよう。

貴方が俺を殺してください。

俺が貴方を殺してあげます。

「殺してあげます」

樹さんは、狂おしそうに笑った。

「……ごめんな。 琉禍」

「樹さん……」

「お前とならいい気がする。 お前に殺されるなら、許される気がする」

大樹さんに似た僕なら、ですか。

貴方は僕を見てくれない。

僕の言葉は貴方に届かない。

貴方が喋っているのは、大樹さんの亡霊。

貴方の神様、夜霧大樹。

俺は彼の、模倣品

「樹さ、」

彼は屈託のない笑みを浮かべて言った。

「だから、いつかに俺と死んでください」

嗚呼。

それでも、彼と一緒に死ぬのは俺だ。

樹さんを残して先に死んだ大樹さんじゃなくて、俺。

死ぬその時だけは、俺は彼を支配できる。 貴方を殺すという手段で。

その時だけ、貴方と直に触れ合えるだろう。

貴方と俺の血が混ざり合って、一つのモノになれるだろう。

地獄でも天国でも、離れる事なく俺は貴方についていける、そう考えると。

俺は、今すぐ死にたい位だった。

以来、俺はただ死を待つ日々を生きている。

樹さん。今ではもう貴方は会社を辞めてしまったけれど。

今ではもう、連絡も取れないけれど。

それどころが、警察が僕を見張っているけど。

でも、俺はいつかの日に、貴方が俺の元にやって来てくれる事を知っている。

知っているから、待っていてられる。

待ってます。待ってます。

貴方に殺される日を。

貴方を殺す日を。

……樹さん。貴方を愛しています。

琉禍（来場者人数100人記念）（後書き）

本編にチラッとでた琉禍君のお話でした。

彼は元々こんな人じゃなかったんですが、書いていたら急に「樹を好き」という設定をつけたくなくて、それが巡ってこんな事に。うん愛です。

琉禍君はもう幼稚園ぐらいのときから樹に懐いてて、いつの間にか樹が好きだったんですよ。そんな感じの子です。

ちなみに今回出せませんでした。琉樹と琉禍の苗字は「あかつき紅月」と言います。

さらに言えば琉禍君の父は琉樹とは別の人なのです。……このネタは完全には没にしてないので誰かは伏せます（笑）

ちなみに没案の中には「樹はよく男の子に好かれる」というのがありました。大樹が死んで琉樹が眠った後の、樹の学校生活を書こうとしたら、そんな友人が出てきてしまったのでやめました。名前は確か……舟木君？とかだったような。実家がヤクザっていう設定に無理を感じてやめました。ただ、樹の「警察に追われる理由」を「樹が好きだから」補助する子にするつもりでしたがこれもどうかなくって思っただけですよ。樹をそこまで悪人にしたくなかったのです。

樹は、本当に普通に恋愛してるだけなんです。「それなのにどうして……」っていうのを書きたいんで、樹には普通の子でいて欲しいんですよ。なのでさよなら舟木君。そしてもう一人誰か、ノーマルの樹の友達出したけどその子なんか名前も忘れた。ごめんね何とか君。

それから他にも色々あるんですよ。

元のタイトルとか、樹たちの元の名前とか。

ま、その内チヨコチヨコ出していきます。

さて、そんな事はおいといて。

この話はネタバレがありました。

琉樹は何故死んだのか。（栄養失調……という線が濃厚か！？）

樹は一体何をしたのか。（昨今の学生にありがちな、万引き常習犯とかなのか！？）

そして樹が琉禍に甘い理由とは何なのか。（半分答え言ってますけど……）

この三つは本編でそのうち明らかにあります。

もしよろしければ、おつきあい下さいませ。

甲崎零火でした

大樹（1000アクセス突破記念）

「緩やかに過ぎる日常。」

俺達は「子供」という、ある種の壁に守られて生活を続ける。社会に出るまでに与えられた猶予。

俺達は、この壁の向こうでは、無力だ。まだ。

けれどそれは、大人でないから、ではないと考える。

肉体が耐えられるようになるまで、待っているだけだ。

では、大人になるといえるのはどういう事か。

俺は、年齢と成長は比例するものではないと考える。

積んできた経験と、それに伴いさざめいた感情の深さ。

それが俺達から「子供」の壁を剥いでいくのだ。

それは幸運な事だろうか。

成長とは喜ばしい事なのだろうか。

俺には分からない。

ただ言えるのは、成長する事で「見える」世界は格段に広くなつていく事だけだ。

視えた方がいい事。視えない方がいい事。

それはどちらが多いだろう。

ただ俺の意見では。

視えない所で世界が動くよりも、例え成す術がなかったとしても、目の前で世界が動く方がいい。

俺から「子供」の壁を剥いだのは、俺の唯一の肉親であったはずの、父だった。

俺の父は早くに妻……母さんを亡くし、そのまま再婚もしなかったために、父と子二人っきりで生活していた。

父の部屋に飾られた、まだ若い、大学生位であろう父達の写真。

その写真を見つめ、大学生時代の話をする父はひどく優しい眼をしていた。

それは、懐かしい過去の話というよりは、現在に続く出来事の始まりを語っているもののように思えた。

そのために、今でも父が母さんを愛しているのだと、そのために再婚しないのだと、それが誇りであるかのように思えたものだ。

そうは言っても父との二人きりの生活。寡黙な父とのそれは息苦しくも会ったが、それを不満に思った事はなかった。

何故なら、俺には二人の幼馴染がいる。

父の写真にも写っている大学時代の父の友人の、子供。

樹と琉樹という名前の、大変可愛らしい二人だ。

この場合の「可愛らしい」は「容姿」と「性格」にかかる。

俺はこの二人に激甘である。

それは当然の事だ。

どこか、ぼーっとしている樹。伏し目がちな眼にかかる、睫毛はなんと長いだろう。あの少し痩せ気味な身体でフラフラしているのを見ると、思わず拉致監禁してしまいたくなる。

フランス人形のごとき琉樹。少し灰色がかった瞳や、口紅いらす

のその赤い唇。その細身からどうして、あの朗々とした歌声が流れ出るのだろう。思わずいじめたくなくなる。

美しいものが嫌いな人間などいない。二人の事を考えていると思わず顔がにやけてしまう。

つまり、俺はこの二人を溺愛しているのだ。

この二人が眼に見える所にいない時、俺は自分でも信じられない位、何も出来なかった。

俺の行動の一つ一つ、どれをとってもそれは樹と琉樹のためのものであり、そうでない事には無関心だった。

俺はいつそ、三人が同じ生き物であったなら、とすら思っていた。

そんな風に生きていた、小学三年生だった頃の話だ。

その日も俺は、樹と琉樹と、琉樹についてきた琉禍と、四人で遊んでいた。

まだ帰りたくない、と、ごねる琉禍をおばさんが迎えに来た。

「駄目よ琉禍。もう帰らなくちゃ」

おばさん……琉樹と琉禍のお母さんは綺麗な人だった。

父の写真と比べれば随分と年をとってはいたが、それでも若く美しくあろうとする意思があった。

琉禍はおばさんの言葉に首を振って樹にしがみついている。

樹が、表情には出ていなかったが、困惑していた。

「琉禍。大丈夫。また明日会えるからね。明日なんてすぐだよ」

俺は琉禍のためではなく、樹のためにそう言った。……嫉妬心も強かったかもしれない。

「……琉禍。また明日」

樹はそう言っつて琉禍の頭を撫でた。……。

「……大樹？まだ遊んでるのか？」

そこで俺は後ろから急にかけられた声に振り向いた。父だ。

「父さん。今日は仕事早く終わったんだね！」

「ああ」

父はふと視線を上げた。

「香子……」

香子。それは誰だろう。俺が父の視線を辿ると、そこにはおばさんがいた。

そつだ。おばさんは父の同級生だ。仲がとてもよかったはずだ。

「……馨君。久しぶりね？」

馨、は父の名前だ。

「本当に……何年ぶりになるのかな」

「この子……琉禍が生まれてからだから、七年ぶりかしら」

「それじゃあ、彼が琉禍なのか……？」

父の目は、樹にしがみついていた琉禍に移った。

「琉禍…君。おじさんに顔を見せてくれるか？」

樹に促されて、琉禍は顔を向けた。

父は脆い物を触るかのような手つきで、琉禍の頭を撫でた。

琉禍はきよんとしている。

「随分と……大きくなったね。……口元なんかお母さんにそっくり

だ」

「目元は……父親に似たわ」

おばさんはそう呟いた。

父の仕事は休みが不定期だ。日曜は仕事をしていることが多い代わりに、平日に休みがある。

あれは確か、やはり俺が小学三年生だった、あれからそう遠くない

い時のことだったと思う。

俺が学校から帰ってくると、その日休みだった父が、電話で喋っていた。

父は俺が帰ってきた事にも気づかずに、こちらに背を向けていた。耳のいい俺には、微かだが、相手の声も聞こえた。

「馨君……確かに私は不本意だったわ。でも、今は……」

「今は、何だ？香子。幸せだ、とでも言うのか？」

父のそんなに苛立った声を聞くのは初めてだった。

「そんな事……ただ、今はあの頃とは違うわ」

「何が違うんだ？俺達は昔と変わらない。今も昔も俺達は……」

「やめて馨君。言わないで……」

「俺には君だけなんだよ、香子。何も変わっていないんだ。ずっとお前の事を思っている」

「馨君……」

「そうじゃなきゃ、あんな事出来なかったさ。お前を奪い返すために俺は……」

「やめて。琉禍の事をそんな風に言わないで。琉禍はただ……私達が愛し合っていたから生まれたの。手段みたいな言い方しないで」

「……分かってる。琉禍は俺の子でもあるんだ。だが、それでもこれで君を奪い返せると思ったのも確かなんだ……まさか、君が全部隠したままだとは思わなかったがね」

「私は自分の子供を守るためなら、それ位の嘘つけるわ。あそこで離婚していたら、琉禍は……。それに、馨君……貴方だって結婚し

ているのよ?」

「……俺は、妻を愛してなどいなかったさ。だが結婚しなければ、今でも君を愛している事がばれていたらろう」

アイシテナドイナカッタ。……愛してなどいなかった?

その言葉だけが、俺の耳を正確に捉えた。

その言葉だけが、俺の頭の中でぐるぐると回っていた。

……目の前が、赤い靄がかかったように霞んで見えた。

頭の中の、霞んだ脳裏に浮かぶ疑問。

何で母さんと結婚したのか?

何で父は大学時代の写真を大事にしているのか?

何で父はその頃の事をあんな風に、過去の事ではないように話す

のか?

……電話の内容を考えれば、それはすぐに察せられた。

答えは単純だった。そして全て同じだった。

奪われた香子さん……琉樹のお母さんをずっと、今でも愛している。

取り戻すために、父は。

父は、母さんを。

愛してなどはいなかったのだ……

その後の事は、よく覚えていない。

俺は気づくと、暗く沈んだ自分の部屋で、ベッドに突っ伏していた。

俺は自分の「子供」の壁が剥がれたのを感じた。

その後、年を得て、父を問い詰めて知った事だ。
俺の父と、琉樹の母は、かつて付き合っていた。
だが琉樹の父と、樹の母は、それを疎んでいた。
ただ、自身の恋情のために。

琉樹の父と樹の母は協力して俺の父と琉樹の母の仲を裂き、結果として琉樹の父は無理に、琉樹を孕ませる事によって意中の人を得た。

だが一方で、樹の母は俺の父に拒絶され、傷心のまま田舎の実家に戻ったところで、強引に見合い話を受けさせられ、結婚した。

樹の母は抵抗したが、傾いた実家の家業を建て直すために、またまった金が必要だった両親に強要されて結婚した。

俺の父は、幼馴染の大人しい母さんを、疑われずに琉樹の母に近づくために、結婚相手にした。

……俺達は、望まれずに生まれてきたのだ。

だが嗚呼、琉禍。哀れな腹違いの異母兄弟。

お前だけが望まれて生まれてきたんだ。

俺達三人とは違って、お前だけが二親に望まれて生まれてきたんだ。

誰にも呪われる事なく。

誰にも疎まれる事なく。

お前だけが、望まれて生まれてきたんだ。

この事を知ったら、樹と琉樹は何と言うだろう。

ただでさえ、二人は自身の恋情に縛られて心掻き乱されているというのに。

二人は、自分達の親までも恋情のために身動き出来ず、その結果自分達を産んでしまったと知ったら、何と言うだろう。

樹はきつと、笑うだろう。

翳のある寂しげな笑みで、笑うだろう。

琉樹はきつと、泣くだろう。

ぐしゃぐしゃの汚い顔で、泣くだろう。

二人は、様々な事に歪むだろう。

そうして様々な事に疲れ果て、歪むだろう。

今の俺と、同じように。

俺は自分が歪みきつている事などとつくに気づいている。

二人のためなら何でもする。変質的で狂的なまでに。

例えば俺は、自分の生まれた経緯を知った事に感謝している。

そのために俺は、「子供」の壁から抜けだせたのだ。

そのために俺は、愛しい樹と琉樹を、彼等自身の激情に気づき、

それから守るために動けるのだ。

心の傷は時間が癒すだろう。だが歪みは治らない。一生歪んだまま。

俺は自分が歪む事など構わない。

だが俺の可愛い、愛しい二人が歪む事など、俺は認められない。

例え、樹が俺を愛する事で歪むのだとしても。

例え、琉樹が俺を憎む事で歪むのだとしても。

そのためなら、俺は。

どんな悪魔にだってなれるのだ。

俺には二人の幼馴染がいる。

樹と琉樹という名前の、大変可愛い二人だ。

この場合の「可愛い」「は「容姿」と「性格」にかかる。

俺はこの二人に激甘である。

それは当然の事だ。

どこか、ぼーっとしている樹。伏し目がちな眼にかかる、睫毛はなんと長いのだろう。あの少し痩せ気味な身体でフラフラしているのを見ると、思わず拉致監禁してしまいたくなる。

フランス人形のごとき琉樹。少し灰色がかった瞳や、口紅いらすのその赤い唇。その細身からどうして、あの朗々とした歌声が流れ出るのだろう。思わずいじめたくなる。

美しいものが嫌いな人間などいない。二人の事を考えていると思わず顔がにやけてしまう。

つまり、俺はこの二人を溺愛する保護者なのだ。

俺の「経験」は、二人と同じように、俺が子供のままでいる事を許してくれなかった。

だが、それには感謝しなくてはならない。

そのおかげで、俺は愛しい二人を守れるのだ。

この、神などいない現実から。

俺達の抜れた互いへの感情。それはきつと、いつか俺達を傷付けるだろう。

いつか俺達を引き裂く事すらするかもしれない。

俺はただそれを恐れ、問題を先延ばしにする事を選んだ。

それが、俺を、樹を、琉樹を傷つけることだととしても。

それで二人を歪めずにすむのなら、俺は……

それは最高の選択ではなかったかもしれない。

だがそれは俺の出来る最善の選択肢だった。

嗚呼、愛しい樹と琉樹。

どうか、歪まないで。

どうか、そのまま綺麗なままで……

大樹（1000アクセス突破記念）（後書き）

しばらくぶりです。甲崎零火です。

何記念にするか迷った（人数の数える方法が変わったため）のですが、無難にアクセス数でいきました。

さて、今回は大樹編です。前回の琉禍編に微妙に絡んだお話でございます。

タイトルにもなってる大樹ですが、当初の予定では、全く「話に触られない人物」の予定でした。

過去編の中でうっかりでてしまってるんですが、本来は「逆光になってる」みたいな感じで、ルックスも会話もほぼなしで通すつもりでした。彼のイメージは全て「神様みたいな人」で通すつもりでした。樹と琉樹で微妙にイメージが食い違う事が感じ取れる位の出演予定だったので……出来なかつたんですが。

いや、「神様」って、人によってイメージ違うじゃないですか。だからあんまり出したくなかつたんですよ。

やっぱりその方がよかつた気がしてきた……

というわけで、私の中でイメージゼロだったために全く動いてくれない子でした……今回凄く納得行かない。

そのうちすぱっ！と書き直す予定でございます。過去編の方も含めて。

ところで、こんな時間（午前五時）に更新するなんて、誰も更新した事気づかないですよね……何て言いつつお暇します。呼んでくださってありがとうございます。

甲崎零火でした。次は本編「樹／現代」で更新します（予定）。

紅月の神（前書き）

お久しぶりです。甲崎零火です。

今回はHALTAさんからのリクエストを頂き、本編の続編を書きました。

……正直、こういった形の結末を全く考えてなかったのも書いていて本当に以外でした。こうしてみると、やはり投稿するという形で、私以外の人の影響を受けて物語が進むのだなと感じます。

リ、リクエストに上手く答えられたかは分かりません……けどつ。彼等が結ばれるにはこれ以外方法がないかな、と思います。た、たぶん……汗

では拙い作品ですが、このキャラクター達を愛でて下さったHALTAさんに最大級の賛辞を込めて……

「大樹が枯れたその後……」の本当の意味での最終話をご覧くださいませ。

紅月の神

あれはいつのことだったか。

今こうして、琉禍を引き連れて暗闇を歩いていると、過ぎる記憶がある。

回想しながら黙々と歩いていると、隣で、息を荒くしていた琉禍が遅れ始めた。

無理もない。社会人になってからは運動など録にしていなかっただろう。

かつての俺もそうだった。

「少し、休もう」

気を使った素振りを見せれば、琉禍はけして頷かないだろう。

あくまで、琉禍の様子など見てないふりをする。

「は、い」

上がった息を無理に押し隠しながらの返事。ほっとした様な顔は隠せない。

嗚呼、でも。

気を使われることに同時に喜びも感じるだろう。

自販機で買った水を、蓋を開けてから琉禍に手渡す。

「……今まで、どこにいたんですか？」

喉を潤してから、重い口を開くように彼は言った。

無理もない。いくら琉禍自身知っているとはいえ、俺は琉樹を、

彼の姉を殺した連続殺人犯だ。

迎えに行っても、彼は待っていませんでしたと言わず、ただ黙ってついて来た。

いつからあるのか、身の回りの持ち物すら用意してあった。彼が出かけにしたのは、銀行に寄って貯金を全て下ろしたことだけ。

その想いの深さ。琉樹の生き写しのような。

だが、俺が琉禍の好意を踏み躪るようになっているのは間違いない。

その想いに答えられるなら、本当はなんだってしてやりたい。けれど、それは出来ない。俺は骨の髄まで大樹のものだから。それで、ありたいから。

それでも、想わずにはいられない。

琉禍と何もかも忘れて生きられたなら……

「色んな所を回っていたよ。観光地なんかも見て回った」

せんのない思考を振って払い、俺は微笑んで言った。

「観光地……随分な所にいたんですね。よく見つからずに……」

俺が殺人を起こす場所は主に東京を中心とした関東近辺だ。

捜査もその周囲に限られる。出入りだけ気をつけていれば、何の不都合もない生活だった。

そう言えば、樹さんが鈍いんですよと笑う。

そうやって、無邪気に笑う顔は、大樹とも琉禍とも似ている。

そんな言葉は、琉禍にとつて苦痛でしかないのだろうが。

「……いつだったか、こんな風に二人でいたことがありましたね」

そうだ。もう十年以上も前に。

「俺がまだ幼稚園に通ってた頃でしたね……遊びに来たキャンプ場から離れて、迷子になって」

「……それで、俺が琉禍を見つけたんだ」

そうでしたね、と笑いながら相づちを打つ琉禍。

「そしたら、俺が今度は足滑らせて」

「……あれはまいった」

見つけた琉禍と一緒に、俺はキャンプ場に向かって歩いた。

「……琉禍!？」

隣を歩いていたはずの琉禍が、唐突に消えた。

一拍遅れで、短く高い悲鳴が聞こえる。

慌てて暗い道に眼を凝らしてみれば、よくよく見ればそこは崖になっっていた。

浅いが、子供にはそれなりに高い崖から、琉禍が落ちたのだ。
足を挫いた琉禍は泣きこそしなかったが、眼に涙を一杯に浮かべ
て俺を見つめた。

俺は琉禍を引き上げることを無理だと判断し、大人を呼びに行こ
うとした。

「何せ、落ちても泣かなかったのに、俺が離れようとしたら泣き出
すんだからな……」

回想しながら、そう呟いてやると、あの頃より段違いに大きくな
った琉禍は顔を赤くした。

「待つてる。今、誰か呼んでくるからな？」

俺は振り返ってキャンプ場に向かって走ろうとした。
すると後ろから微かに嗚咽する声がする。

「どうした！？どっか怪我したのか？」

琉禍は静かに、ぼろぼろ涙を零し始めた。

慌てて俺が理由を問えば「樹兄ちゃんいかないで」と言う。

「すぐだよ。すぐ戻ってきて助けてやるから」

琉禍は頭を振る。そして涙も流れるままにこう言ったのだ。

「たすけなくていいから、いかないで」

俺は驚いた。琉禍はこんな風に、訳の分からない我俣を言う子で
はない。

「なんで……」

「樹兄ちゃんがいれば、それでいいからあ
そういつてまた泣くのだ。」

俺は頭の中が真っ白になった。予想外の展開過ぎた。

だが、それも一瞬。俺はすぐに決めた。

俺はその崖から飛び降りた。

目の前には呆然としたような琉禍の顔。

「じゃあ、一緒にいる。一緒に待つ」

俺は格好つけて、琉禍の頭を撫でてやった。……予想外に痺れる足を隠しながら。

「お兄ちゃん！」

琉禍は嬉しそうに俺に抱きついた。

頭を撫でてやりながら、考える。

いつの間に、こんな風に好かれてしまったのだろう。

それから俺たちは、探しに来た親達に見つけられるまで一晩、抱き合っていた。

寒いからと、ぐずる琉禍が離れなかったためでもあり、俺があの暗闇の中で唯一の温もりを離したくなかったためでもある。

「……こんな感じだったな」

俺はそう言つて、後ろから琉禍を抱き寄せた。

「い、樹さん……？」

慌てふためく琉禍の声は聞こえないふりをする。

自分でも、何故こんな行動をしたのか分からない。

ただ、当時からだ俺だけを見つめ続けていたのである。琉禍が、哀れであり、可愛くもあった。

そして……当時感じた、あの「暗闇の中での唯一の温もり」という発想が、現状と重なって思えた。

琉禍の肩口に顔を埋めながら、俺は考える。

俺にとって、やはり何よりも優先されるべきなのは大樹の存在だ。だから、どうしても琉禍の想いを受け入れられない俺がいる。

心よりも、そうと決めた俺の理性が許さない。

この先に、地元の人位しか知らない綺麗な滝がある。

俺はそこで琉禍に殺され、殺し、ともに大樹の元へと向かうのだ。

……本当に？

この温もりを。この暗闇の中、唯一の温もりを。
殺すのか？殺す？

この色に。何一つ意味を持たない世界の唯一の色に。
殺されるのか？殺させる？

大樹の忘れ形見。

琉樹の忘れ形見。

それでありながら、こんなにも、琉禍として意味ある彼に？

「……樹さん？」

動かず、物言わぬ俺に何かを感じ取ったのか、琉禍が俺の顔を見
ようとする。

俺は拒む。琉禍の肩口に強く強く顔を埋め、眼をそらす。

……出来ない。させられない。

俺には出来ない。

こんなにも、俺にとって今、唯一の生きている全てを殺すことな
ど。

彼にはさせられない。

こんなにも、ずっと前から、ただ俺だけを見つめている彼にはさ
せられない。

……死ぬのは、俺だけでいい。

そうだ。

俺だけでいい。

もう、どちらにしる、俺は生きていけない。

俺は派手にやりすぎた。どこに行っても、規制は厳しくなっ
てきている。

警察も無能ではない。これ以上は、もう続けられない。

それに……これ以上生きたなら、俺の全てが変わってしまう。

大樹ではなくなってしまう。

俺は、俺は大樹の使途のまま死にたい。

そう思う。

嗚呼。いつの間に彼はこんなにも大きい存在になっていたのだろ

う……………？

「樹さん」

冷たく冴え渡るような、琉禍の声が聞こえた。
手を握られ、何かを持たされる。

それが何か、気づくのがもう少し早かったなら。

「つく……………！」

琉禍は俺の手ごと、それを彼自身の腹に押し付けた。

そして、紅。

紅、赤、銅、滲。

琉禍の腹から血が零れる。

「る、か……………？」

俺は呆然として、彼の名を呟いた。

「だって……………樹さん…いい、ま……………やめようと……………した、でしょ？」

吹き出る血に顔を紅く染めながら、琉禍は壮絶に微笑^えんだ。

「そん、なの……………許、さない……………から」

琉禍が身体ごと振り返り、俺の顔に触れる。

温かい琉禍の血。それが、顔に付く。

「さ、あ……………い、っしょに……………逝き、ましよう？」

琉禍のナイフをもった手が、震えながら俺に近づけられる。

嗚呼。そつだ。

「そつだな……………」

俺はそう言つて、琉禍の手に自分の手を添えた。

鈍い感覚。吹き出る紅。目の前の琉禍と同じように。

そつだ。俺は……………

俺は幸福だった。

樹さんとともに死ぬ。貴方に殺され、貴方を殺せる。

永遠に貴方のものになれる。貴方を俺のものに出来る。

腹を刺したのもそのためだ。この至福の時間が少しでも長引くように。

ずっとずっと、この瞬間だけを望んで、俺は……俺は樹さんの胸にもたれかかった。まるで恋人に縋りつく女のよう。

この瞬間だけは、貴方は、俺のもの。

「いつき、さん……あい、してる……あいしてます」

鈍い幸福。貴方の熱い吐息が、俺の耳元にかかる。

「ああ……おれ、も……たし、かに……るか、が……すき、だった……」

「愛してる」ではないことに、俺は気がつかないふりをする。

この背中に回された貴方の腕を、それだけを、信じることにする。

この幸福に、快感すら感じる。

嗚呼、俺の、僕の愛情はこうして成就するのだ。

あなたとぼくのちが、まざりあって、そして……

めが、かすむ。まだ、あなたをみていたい。

いつきさん……いつき、さん……

最期に、確かに、彼の唇と僕の唇が重なり合う感触がした。

眼が覚めたら、写ったのは白い天井。

死の世界かと、樹さんはどこかと、見渡したらそこにいたのは両親だった。

号泣する母。その肩を抱く父。……そして大樹さんのお父さんをはじめとする両親の幼馴染達がいた。

僕は、現状を理解した。

樹さんは、僕を置いていったのだ。

逝ってしまったのだ。

「僕は……助かったの？」

そう問うと、父が目元を潤ませながら答えた。

たまたま通りかかったという人が、救急車を呼んでくれたのだよ。

僕は、名乗らぬ男の呼んだ救急車に助けられたのだという。

つまりは、樹さんの呼んだそれに。

倒れる僕の近くには、誰かの、つまりは樹さんの多くの血が流れていたという。

けれどその行方はいまだ掴めぬまま。……その、遺体も。

僕は、捨てられたのだ。樹さんに。

疲れたからと言って、僕は両親達に部屋から出て行ってもらった。

樹さん。……樹さん。

何故貴方は、最期の死の縁に僕をもぎ放したのですか。

樹さんと生きられないのなら僕は、貴方を殺し、そして殺されたかった。

何故、救急車など。そんな無粋なものを。

貴方と僕の間、そんなものなど。

……それとも。

貴方にとって、僕はやはり。

……姉さんと大樹さんの、忘れ形見に過ぎないのですか？

贖物など、いりませんか？

そうならそうと、こんな形ではなく。

こんな中途半端な捨て方などせずに。

ただ、貴方の手で、大樹さんの下に送られる犠牲者の一人にしてくれたら、よかったのに……

貴方は最期に、一体誰に口付けたのですか？

大樹さんですか？

姉さんですか？

……どちらにせよ、僕ではないのですね？

そう思うと、胸が痛んで痛んで、死にそうだった。

それでも、涙は一筋も流れなかった。

僕は尋ねてきた警察に、完全なる嘘を貫き通した。

樹さんのことを話すわけにはいかなかったから。

その結果、僕は通り魔に襲われ、反抗したとして、会社から暫く休暇を取るように言い渡された。溜まっていた有休の消化も兼ねてだ。感謝する理由もない。

俺は塞いで塞いで、意識すら散漫になって行く。

人の構造として不自然だが、呼吸すら気付けば止まっていた。意識という無意識が、人体の構造にすら干渉した。

それほどまでに、俺は樹さんと共に死にたかったのだ。

入院生活を送っていたある日、何度も何度もしつこくやって来る刑事の一人が、僕にあの日の所持品を返してきた。

それらは、遠い昔、樹さんに殺されると決めた日、楽しみながら用意した物の数々。

全てが無駄になってしまったものの数々。

そう考えると腸が煮え返るようだった。思わずそれら全てを部屋の壁に投げつけた。

落ちるそれら。僕は冷めた目で見つめた。

その中に、一つだけ見覚えのないものが混じっていた。

不審に思い拾い上げると、それは在りし日の忘れ形見。

姉さんの、日記帳の、鍵。

……これは樹さんにあげたもの。

何故、これがここに？

毎日検査に来る看護士に聞けば、それは僕が運ばれてきた時にかかっていたものだと言う。

ではこれは……樹さんが置いていったのか？

……一体何のために？

分かりはしない。分かりはしない。

今はただ。

貴方が僕を殺してくれないのなら。

せめて。

せめて、貴方の遺体に縋りたい。

愛する人よ。

あなたと。

退院して暫く経った後、僕は独り「あの場所」に行った。
鬱蒼とした山道。地元の人間以外はこの道すら知らない。
それでも、僕のせいで騒動になったせいかな、人に踏み荒らされた
跡がかなりあった。

山道はあの日よりも草が踏み鳴らされ、歩きやすかった。
そこは、未だ僕と樹さんの血の痕が残る。

……いくら腹を刺したとはいえ、そう遠くまでは行けなかったは
ずだ。あの出血では。

血自体は、きつく布か何かで巻いてしまえば、垂らさずに歩けた
だろう。

だが、何処に……？

そもそもあの日、樹さんは何処へと向かう気だったのか？

僕は闇雲に、山道を進んでいった。

どれぐらい歩いただろうか。

病み上がりの身体では、この山道は思うように歩けない。

樹さんは、どれ程の意思で……。

想いに囚われていると、目の前が急に開けた。

そこにあっただのは。

滝だ。

さほど大きくないとはいえ、力強く水が落ちていく滝。

僕には分かった。

ここだ。

樹さんが目指していたのは、ここだったんだ。

僕は水に濡れるのも構わず、まっすぐに滝へと向かっていった。
濡れた服が肌にまとわり付く。それは冷たくも温かい。

零れ落ち続ける、滝に触れる。

痺れる程の水の勢い。

そこに何故か、僕は樹さんを重ね合わせた。

「いつき、さん……」

両腕を滝の中に差し入れる。

崖に突き当たるであろうその手は、そのまま通り抜けていった。

「……？」

疑問に思い覗いて見ると、滝の真中あたりの崖だけ丸くくりぬかれたようになっていた。

一人が入れるような大きさだ。

まさか。

そう思いながらも、逸る胸が抑えられなかった。

僕はその穴を潜り抜ける。

中は、思わぬほどに広がった。言うなれば教室ほどの大きさだろうか。

分かるのはそれ位で、暗くて他の事は分からない。

濡れてしまった携帯は、辛うじて生きていた。

それで周囲を照らしてみる。

すると。

そこには。

貴方が。

「いつき、さん」

奥の壁に、もたれるように座るその姿があった。

その姿は、平時とさして変わりなかった。

けれど。

顔色は、悪いを通り越して最早真っ白。

服に付いたその紅を見れば、死んでいることは明らかだった。

屍蟻化、という奴なのだろう。

「樹さん……いつき、さん」

来ましたよ。

貴方の捨てた、贗物が。

貴方と死ねなかった役立たずの僕が。

その、微笑すら浮かべたような顔に触れる。

「樹さん。樹さん」

もう何を言うべきかも分からなかった。

僕は冷たいその頬に口付ける。

あの日、彼がそうしたようにその肩に顔を埋める。

「樹さん」

あんなに。憎んだはずなのに。

それでもその姿を前にしたら、恋情しか思い浮かばない。

だって総てだった。

ずっと、ずっと。

生まれてからこの方、貴方だけを想い続けた。

「愛してます。愛してます、樹さん」

何度も何度も口付ける。その額に、頬に。……唇を除いて。

だって、そうでしょう？

貴方の唇は、僕のものではないもの……。

口付けを、その首、肩、手、とずらしていった時に、僕は樹さん

の手持っていたものに気づいた。

「これは……」

その手には、僕等を刺したナイフ。

そして、日記帳。

姉の、日記帳だ。

僕は急いで、胸にかけてネックレスを取り出した。

その強固な日記帳は、一度は濡れたであろうが、その強固な皮の

表紙に守られていた。

震える手で、頁を捲る。捲る。

そしてたどり着いた。

彼の血と、ナイフの切っ先で書かれた文字を。

そこに書かれていたのは。

僕は泣き出した。

あの日から、一度も零れなかった涙なのに。

今。

僕は溜まらず、彼の遺体の唇に口付けた。

「樹さん、樹さん……！」

堪らなかつた。貴方のいない人生を、僕はこれから暮らしていかなくてはならないのが。

けれど、それは幸福でもあるに違いないだろう。

貴方の言葉を守れるという、幸福。

堪らなかつた。僕にとっての神様は、ずっと、ずっと樹さんだったのに。

あなたがそうと気づきさえすれば。

そうでありさえすれば。

貴方と僕は今も幸せに生きられたはずなのに。

恨みます。義兄さん。

貴方という神を。

異教徒にしかなり得ない僕は。

「愛してます。愛してます、樹さん……」

虚にしか響かないと分かっていながら、僕は何度もその言葉を繰り返し、泣き続けた。

外は暮れ行き、滝に差し掛かるのは紅い月光だけ。

その紅い部屋の中で、僕は、いつまでも僕の神様に口付け続けた。

「琉禍。確かに俺の全ては大樹のものだったよ。

この愛情も、命ですらも。

全ては大樹かみさまのためにあつた。

でも、生きてる人は皆そうだ。神様の掌の上でしか生きられない。それ以外は何処にも行けない。

俺の役目は、ずっと、大樹の楽園に人を送り続けることだった。

でも、それが俺の全てなはずだったのに。

琉禍にだけはそれが出来なかつた。

琉禍は送れない。

紅月琉禍という、お前個人だけは、大樹になんてやらない。
琉禍は俺のものだ。

だから、俺と一緒に逝かせない。

琉禍。生きて生きて、俺を想い続ける。

琉禍。その髪の毛一房も、総てが俺のものだ。

俺の世界で、唯一本物の、琉禍。

愛してる。』

紅月の神（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

私の予定では、次は「親編」を書く予定です。

……たぶん。

もしよかったらお付き合いください。

本当にここまで付いてきて下さってありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5655c/>

番外編：大樹が枯れたその後に.....

2010年10月11日23時45分発行